

このコーナーでは、教科書に掲載されている生徒作品を取り上げ、奥村高明先生に、その作品の見方や考え方を紹介いただきます。

奥村 高明
おくむら・たかあき
聖徳大学児童学部教授。
1958年宮崎県生まれ。
小・中学校教諭、美術館学芸員の後、
文部科学省教科調査官として
学習指導要領の作成に携わる。
専門は図画工作・美術教育、
鑑賞教育など。芸術学博士（筑波大学）。
『子どもの絵の見方～子どもの世界を
鑑賞するまなざし～』（東洋館出版社）、
『美術館活用術～鑑賞教育の手引き～』（
美術出版社）など、著書多数。

1. 作品の記憶

仕事柄、よく子どもの作品を、本の表紙や記事に用いる。大抵の場合、子どものコメントが必要になる。ただ、執筆する時点では、作品をつくってから数年経っていることが多い。小学生ならずで中学生、中学生は高校生以上になっている。頼む側とすれば、「何年も前につくった作品について覚えているだろうか」、「コメントが書けるのだろうか」と不安になる。でも答えは全てYesだった。

今回取り上げる作品も同じだ。当時中学3年生だった作者は、すでに大学生になっていた。でも、作品に描かれているものについて尋ねると、あたかも今描き終わったばかりのように、制作のプロセスや、そのときの気持ちなどを「覚えて」いた。以下、作者からのメールを抜粋したものである。

(1) 私

「未来の自分へ」という題材だったので、30代の自分を描こうと思いましたが、きっとその頃の自分は、平凡で普通の生活をしているだろうと想像しました。少し小じわができていて、アルバムを見ながらうたた寝している自分の姿が思い浮かびました。

(2) アルバム

薄い黄色のアルバムに、一人旅の風景写真が2枚貼ってあります。自分が写っていないのは、学校に居場所を感じることができず、いつももやもやしていたからでしょう。

(3) 猫

当時飼っていた猫がモデルです。自分が30代になる頃には、もう生きていないだろうと思いましたが、きっとまた猫を飼っていると思いま

した。おなかの模様はうまく描けましたが、ヒゲと眉毛を描いたとたん、貧弱になってしまったように思います。

(4) カーテン

好きだった漫画をヒントにしました。色は、自分の部屋のカーテンと同じ赤色。カーテンを描いたら、風が表現でき、絵に動きが生まれました。カーテンの向こうには、緑が広がっているイメージです。青色を先に塗って、その上から赤色や白色を重ねて、風を表現しました^(※1)。

(5) 感情

平凡には、「つまらなさ」と、その中にある「温かさ」の二つの側面があると思います。絵の通り、平凡な未来になってほしいと思う自分と、全く違う未来になってほしいと思う自分。この絵を描いたときは、複数の感情がありました。

2. 私の世界

大学生になった作者が、中学3年生のときの作品について「覚えて」いたと述べたが、正確には「覚えて」いるわけではない。記憶は頭の中にあって、それを引き出すようなものというよりも、むしろ「私」と「対象」との「間」に存在している。

例えば、「昔住んだ場所の地図を書いてください」と言われた場合、多くの人は距離や方向、細部などまで正確に「再現」することができない。しかし、その場に行けば歩き始め、自分の家にたどり着くことができるだろう。看板などの目印や道の間隔、距離、光や空気などと対話しながら、迷うことなく歩き回れる。

それは記憶が、単純に頭の中に入っているものではなく、対象との関係で成り立っていることを示している。



「平凡な日常」
段ボール・ポスターカラー 90×60cm 『美術2・3下』P19に掲載

作品も同じである。「昔描いた作品について説明してください」と言われたらそうとう困難だ。しかし、「私」が当時描いた自分の「作品」と向かい合えば、多くの場合、まるで昨日描いたかのように記憶がよみがえってくる。それは、記憶が「私」と「作品」の間に存在していることを示している。

3. 作品という「私」

本作の作者が興味深いことを述べている。

「美術は自分の世界をつくれるのが好きでした。自分の世界を表現するのに夢中でした」

作品はただの完成品ではない。そのときの「私の世界」、私そのものである。

同じような言説が図工や美術の業界にはある。いわく「作品ができるときに『私』ができる」、「『私』をつくる図工・美術」などである。これらが言わんとしているのは「子どもたちは『私』をつくるように作品をつくっている」ということだ。

同時にこの言説は、指導方法や指導者の構えも問うている。

「指導者の指示どおりに描かせるのか」

「その子の世界を成立させようとしているのか」

「どこまで指導して、どこから任せるか」……などである。

本作品についていえば「未来の自分」だったという。おそらく、作品という「私」と、未来の「私」^(※2)という二重の「私」の成立をねらったのだろう。その意図はこの子において見事に成功していると思う。

※1 先生に「青を入れると絵が締まる」と言われ、全ての色に青を少し足して着色している。
※2 「未来」とは言っているが、実際のところ、現時点の自己のメタ認知であろう。

本連載は、今号で最終回となります。
2年間ご愛読いただき、ありがとうございました。